

## 大いなる世話人 ― 小熊節子さんのこと

元日本人会会長（ジェットロウィーンセンター所長） 藤井 清司

1) 歴代のウイーン日本人会会長の誰しものがそうであったように、小生も小熊節子さんには大変にお世話になった。小生の場合その手始めは、小熊さんが、彷徨える日本人会の事務所を、御自宅へ受け入れて下さったことであった。

清滝前会長から事務の引継ぎを受けた際、日本人会の事務所を何とかしなくてはならない、との申し送りを受けた。現地を訪れてみると、19区とは言っても場末で、貧相な住宅の屋根裏部屋が事務所であった。交通の便は悪く、何よりも保安が心配された。

清滝さんから紹介されていた小熊さんに相談したところ、御自宅の一室を開放してもよい、との願ってもない申し出で。早速事務局の女性共々、ウイーン中央駅の近くに所在する豪邸を訪問した。小熊さんは、玄関を入れて直ぐの一室を提供して下さいとのこと。天井は高く、机、戸棚等の調度品も立派で、しかも格安の家賃で貸して下さいという。交通の便が良く、小熊邸の従業員も居るので安全性は高い。事務局の女性も大喜びで、ここに事務所の移転という難問は解決した。

2) 当時の日本人会会報、「ウイーンの風」の誌面は、会員から寄せられた生活情報（〇〇売りたい。求む借間。等々）が主なものであった。小生は、ウイーンならではの記事も必要ではないかと考え、小熊さんに相談した。小生の希望は、① ウイーンの毎月の音楽会情報、② ヨーロッパの音楽あるいは音楽界にまつわるエピソードを紹介する記事、であった。特に後者の場合は、学識豊かで、且つ薄謝でも寄稿して頂けるといふ奇特な方が、果たして居るのかどうか心配だったが、小熊さんのお蔭で全て解決した。

小熊さんは、音楽会情報についてはウイーン在住の音楽評論家、山崎睦氏の名前を挙げ、また後者についてはウイーン音楽大学助教授で、ピアニストの今井顕氏が適任であると推薦され、お二方に対する紹介の労まで取って下さった。

山崎氏にお会いして、毎月の「ウイーンの風」に、翌月の音楽会（国立オペラ劇場、楽友協会ホール、コンツェルトハウスが主体）の開催予告と、それらの中の主な見所や聴きどころを纏めた記事をお願いした。薄謝にも拘らず、山崎氏は快く了承して下さいました。

今井氏にもお会いしたところ、既に同氏は「音楽雑学帳」という副題まで考えておられ、快く連載を承諾して下さいました。「書くネタは沢山ある。」とのことだったが、雑学帳については隔月の執筆でお願いしたように記憶している。

音楽会情報と音楽雑学帳は、'83年の秋から「ウイーンの風」に掲載された。その第一号を目の当たりにして、会報の誌面が一新された喜びに浸ったことを記憶している。小生がネタのことを心配していた雑学帳も、今井氏が言っていた通り、次から次へとエピソードが飛び出し、毎号会員を楽しませてくれた。

### 個人的なエピソードその1 徳仁親王殿下とキュッヒルさんの共演

‘85年の夏、当時英国に留学しておられた現皇太子徳仁親王殿下が、休暇を利用してウイーンを非公式に訪問された。ヴィオラ奏者でもある親王殿下のご希望もあってか、キュッヒル弦楽四重奏団のメンバーとの共演が実現し、19区のベートーヴェンハウスで、小生も拝聴する栄に浴した。

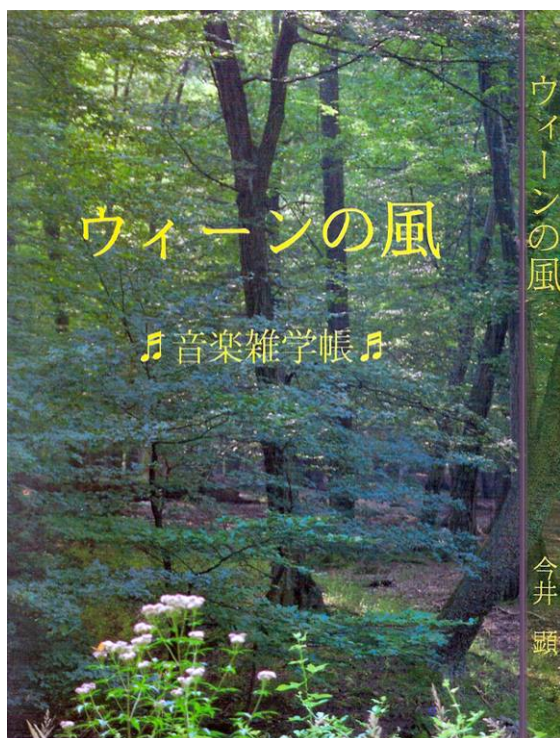
会場が狭くて椅子を並べられないこともあって、大使館から招待された聴衆は僅か十数人。思い思いに部屋の隅に佇んで、四重奏に聴き入った。演奏された曲目は、モーツァルトのセレナーデ・他であったと記憶する。

### 個人的なエピソードその2 吉永小百合に会い損ねた？話

’86年に入って、クーデンホーフ光子の伝記が、日本でドラマ化されることになり、主演の吉永小百合が近く訪澳するとニュースが伝わり、ウイーンの日本人社会は色めき立った。早稲田出身の某支店長に至っては、新にウイーン稲門会を結成して自らが会長に納まり、彼女に会うべくアピールした程である（小百合も早大出）。この熱気を受けて、大使館側は対応に苦慮しているようであったが、そのうちに小生は、急病のため病院へ担ぎ込まれ、退院した時には小百合の訪澳は既に終わっていた。彼女に会えた一般の日本人は、誰もいなかったという。人づてに聞いたところによれば、大使館側は、日本人会の会長には会わせてもよいと考えていたが、ご本人が入院してしまったので取りやめにした、とのことである。もしそれが本当の話であったとすれば、まことに惜しいことであった。

<藤井 清司（ふじい・せいじ）> （'83年6月～'86年7月）

現在は勿論年金生活。一向に上達しない囲碁を、懲りずに楽しんでいる。



“音楽雑学帳”（1990年出版）